

コロナウイルスによる臨時休校中のオンライン授業・授業外の取り組み

1人1台のiPadを活用した双方向授業・授業外の取り組み

学校法人 鎮西敬愛学園 敬愛小学校 副校長 龍 達也

キーワード：小学校、コロナウイルス、臨時休校、ICT、オンライン授業

実践の概要

新型コロナウイルスによる内閣総理大臣の休校要請を受けて、3月2日～6月14日の期間にICTを活用してオンライン授業を実施した。午前中3時間の時間割を組み、教師は学校（出勤8割減の要請時は在宅）にて授業を実施し、児童は在宅にて受講。午後からの時間は、教科の枠にとらわれないKeiai Channelや、オンライン図書館、オンライン保健室、体育チャンネル(Online GYM)、他校とのオンライン英会話など、授業外でも児童の活動の場を設定した。

1. 目的・目標

(1) 臨時休校中も「学び」を継続する

本校は7年前より1人1台の個人所有のiPadを学習活動に活用してきた。そのツールとこれまでの経験を活かし、新型コロナウイルスの影響で学校に登校できない時間も、双方向型で授業を実践することで、子どもたちの学びを継続させることを目標とした。

(2) ICTを活用して放課後の時間のサポートを行う

コロナウイルスの影響で、在宅時間が長くなるため、授業外にも様々な取り組みを企画した。

2. 実践内容

2.1 臨時休校中も「学び」を継続する

児童は毎朝9:00から指定されたZoomのミーティングルームに入室。15分間、クラスごとに朝の会を実施した(写真1)。コロナ禍での家庭事情の急変や在宅時間が長くなるストレス等を鑑み、健康調査を毎朝実施した。



写真1 オンライン授業の様子

Zoomに接続し、友達や先生の顔を見ると、皆とても嬉しそうだった。その後、学校と同じようにZoomを繋いで10分間の朝読書を行った。Zoomに接続しておくことにより、画面越しではあるが、「皆とつながっているという安心感ももてました」と多くの児童が回答していた。

9:30から45分間で実施する1限目がスタート。1～3年は国語・算数・英語の3教科。4～6年は理科・社会を加えて5教科の時間割を組み、1日3コマを設定した。授業は、従来の授業と同様、「①一方通行の講義形式にならないようにすること」「②子どもたちが『学びたい』という課題・テーマになっているか常に考えて計画を立てること」「③児童の活動やクラスメートとの協働の場面

を設定すること」「④適切なフィードバックをおこなうこと」を意識して授業を計画するように全職員で取り組んだ。学習課題の配布・提出はロイロノートを使用。課題の提出では、iPadに書き込むスタイルやノートやプリントの写真送信、また、国語・英語の音読を録音音源提出など教科担任が工夫をしながら実施した。「教室よりも先生の声をはっきり聞こえてわかりやすい」「黒板よりもiPadの画面に大きく資料がでるのでポイントがわかりやすい」という声が多数聞かれた。

また、臨時休校中に多くの本と出会って欲しいとの願いから、学校図書館のオンライン貸出を行った(写真2)。市内の公立図書館はコロナウイルスの影響で閉鎖されて



おり、子どもたちの読書活動を支えるために、「① Google スプレッドシートに

写真2 オンライン図書館の特設サイトで1年間に貸出が多かった書籍を学年別に紹介」「②貸出希望の図書のコ드를Googleフォームにて申請」「③貸出可能連絡を保護者に行い、守衛所(無人)にて貸出」という流れでオンライン貸出を行った。毎日利用する児童がでてくるなど、コロナ禍でも学校図書館を有効に活用することができた。

2.2 ICTを活用して放課後の時間のサポートを行う

コロナ禍での家庭中心の生活は学習指導以外でも配慮が必要と考え、授業外にも様々な取り組みを行った。

まずは、運動不足の対策である。体育専科の先生が、10分間のできるエクササイズ動画を作成し、ロイロノートに保存。活用方法



写真3 OnlineGYMの動画

については、クラス担任に一任した(写真3)。担任と一緒にZoom越しでエクササイズをしたり、運動の様子を動画に撮影して提出させたりとクラスに応じて活用。児童からは「体力が落ちていることに気づいた」「毎日取り組んで運動不足を解消したい」という感想が多数あり、子どもたちは積極的に取り組むことができたようであった。

次に、家庭中心の生活による精神的ストレスをキャッチする取り組みとして、毎月児童アンケートを実施し、また、オンラインで保健室を開室し、子ども・保護者からの相談ができるようにした(写真4)。

「午後からの家での過ごし方」を含め色々な家庭の悩み等が寄せられ、対応し



写真4 児童アンケートサイト

た。各クラスでもオンライン個人面談を実施し、オンラインでも児童の精神的なストレスを軽減できたのではないかと感じている。

午後の時間の過ごし方については、オンラインを活かした授業とは異なる学習の場を設定することとした。

まずはオンライン英会話。北は北海道、南は九州までの5つの学校を Zoom でつないで、小・中・高校生 83 名にてグループワークセッションを通して、少人数班での英語交流を行った。「最初は恥ずかしかったけれど通じたので嬉しかった」「回を重ねるごとに上手になった」「またぜひやってみたい」と参加者にとって達成感溢れる活動となったようである。そのような子どもたちの英会話への意欲を継続させるため、合同会社 DMM 様と相談し、無料でオンライン英会話を利用させていただきご縁をいただいた(写真5)。ICT 機器を活用して、海外の先生との



写真5 DMM 英会話の様子

の1日25分マンツーマン英会話を行い、英語と触れ合う機会を増やすことができた。そのほかにも、学年・教科の枠を超えて、

先生たちの得意分野で学び合う Keiai Channel を開局。Keiai Channel では、Zoom を通じて「社会科クイズ大会」「料理チャンネル」「似顔絵講座」「プログラミング講座」等々、教職員が得意分野を活かしながら様々な講座を開催した(写真6)。子どもたちは自分が興味のある講座を受講して、日頃とは違う学びがあったようである。



写真6 Keiai Channel の様子

委員会活動やクラスでの話し合いも Zoom にて行い、6年生を送る会に代わるメッセージ動画の作成など、ICT 機器を駆使することで、通学中と同じような児童間交流を行うことができた。

3. 成果

児童

オンラインじゅぎょうに きちんとさんかしていますか？

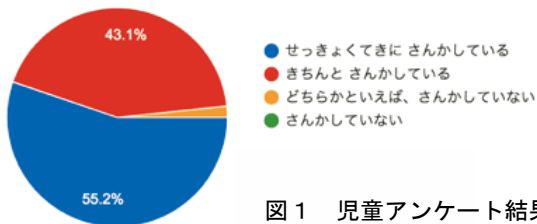


図1 児童アンケート結果

このオンライン授業の児童・保護者の満足度は非常に高いものであった(図1、2)。

特に児童の中で多かった感想は、「オンライン授業で、学校にいるのと変わらない授業ができて、楽しい」「みんなの顔がみれて嬉しい」というコメントで、先生や友達とオンラインでつながっている喜びがとても大きかったことがうかがえた。

保護者

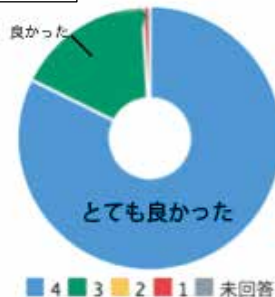


図2 保護者アンケート結果

また、本実践を通して、教員の ICT スキルは格段に上昇した。本校では7年前から iPad を使った教科指導研究を行っ

ており、ロイロノートを使用した双方向型の授業形式に慣れていたこともあり、3月2日のオンライン授業スタートからスムーズに新形態に移行することができた。アクセス急増に伴う Zoom・ロイロノートの接続不良等の問題に関しても、子ども・教師共に臨機応変に対応することができ、ICT スキルの活用力はこのコロナ禍で間違いなく成長したと感じている。

4. 今後に向けて

6月15日ようやく学校再開ができ、子どもたちは登校して授業を受けることができるようになった。しかしながら感染のリスクを十分配慮しながら新しい学校生活様式を実践していくために、ICT 機器を前年度以上に活用して授業を行っている。児童・保護者との連絡も連絡帳ではなくオンラインを通して行うようになり、学校行事でも ICT 機器を活用し、オンラインでの授業参観、Zoom での保護者面談、Zoom を併用した夏期講座、オンラインでの盆法要(仏教法話を聞く会)、オンライン社会科見学と、コロナ禍の臨時休校中のオンライン授業実践後、これまで以上に ICT 機器を効果的に活用しながら教育活動を進めることができています。